世界動物文学全集

6

狼っ子
走れ子熊よ
ライオン街をいく

界動物文学全集

6

講談社

世界動物文学全集6　狼っ子
走れ子熊よ
ライオン街をいく

昭和54年4月18日　第1刷

著者　スターリング・ノース
アービング・ペティト
アンソニー・バーク
ジョン・レンダル

訳者　藤原英司
諏訪晃代

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21　郵便番号112
電話東京（03）945-1111（大代表）振替東京 8-3930

印刷所　豊国印刷株式会社

製本所　藤沢製本株式会社

定価　1500円

©藤原英司　諏訪晃代　1979年　printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

0397-405067-2253（0）　（文2）

目次

狼っ子　5
走れ子熊よ　167
ライオン街をいく　275
解説・藤原英司　346

装幀　蟹江征治

イラスト　田中豊美

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

狼っ子

スターリング・ノース
藤原英司訳

THE WOLFLING

by

Sterling North

Copyright © 1969 by Sterling North
Japanese translation rights arranged with
E. P. Dutton & Co. Inc. through Japan
UNI Agency.

百　年　前

いつの世でも、その時代の人にとって、世の中というものはたいてい十分生きるに値するものである――だがそれは、その人が若ければの話だ。

今から百年前のウイスコンシン州には、野生のガンやカモ、リョコウバトなどのおびただしい群れがすんでいた。川の流れはすべて美しく澄み、魚がたくさん泳いでいた。そして遠くかすむ西の地平線のかなたには、魅惑的な未知の西部がひろがっていた。

だが、いつの世でも、その世なりに、今日のわれわれとはちがった独自の悩みがあるものだ。そして、百年前のアメリカでは、人びとは国内を二分する血なまぐさい南北戦争の試練に耐えていたのである。われわれがこよなく親愛の情を寄せる大統領アブラハム・リンカーンが、凶悪な暗殺者の犠牲となった時代だ。それから、うちつづくインフレーションの数年が過ぎ、やがて一八七三年の大恐慌が到来した。

わたしの父*は、自分の少年時代のことをつづったおびただしい量にのぼる手紙を残した。その手紙と、わたし自身の記憶に残る美しい時代の思い出をたよりに、今からここに、百年前の南部ウイスコンシン州の生活を再現してみたいと思う。

ここにこれから書こうとする物語が、いくらかでもその時代の特徴をとらえることができれば私としてはまことにうれしい。特にわたしはスア・クムリン*という人物の姿を浮彫りにしてみたい。この人はスウェーデン系のアメリカ人で、当時の偉大なる博物学者であり、わたしの父にウイスコンシン地方のすべての鳥や獣、花や木についての知識をさずけた。

したがってある意味では、これは記録小説であり、内容については、できるかぎり確証ある史実にのっとった。しかしまた別の意味では、これは過去、現在、未来にわたるわれわれの生き方を指し示すものともなるだろう。人はおのおの、この世でただ一回の人生しか経験しえない。願わくば、その一回かぎりの人生を、おのおの意味あるものにしたいものだ。

ニュー・ジャージー州
モーリスタウンにて

著　者

＊原注　わたしの父、ディビッド・ウイラード・ノースは一八六二年八月十日に、ウイスコンシン州南部のジェファーソンとディーン郡の境界地帯にあった丸木小屋で生まれた。そして一九六二年一月七日に死んだ。父は近くのアルビオン学院で教育を受け、さらにウイスコンシン州アプルトンのローレンス・カレッジとウイスコンシン大学で学んだ。

父が八十歳の時に私あてに書いた何通かの手紙が、この小説の資料の一部になった。

本書に登場するロビー・トレントが、すべて父の少年時代の姿そのままというわけではない。しかしロビーがその面影の一端を伝えていることは確かである。

＊　横棒を組んでつくったじぐざぐ型の柵のむこうに、スウェーデン系アメリカ人の博物学者スア・ルドウィッグ・セオドア・クムリン（一八一九―一八八八年）が住んでいた。彼はスウェーデンのヘルンダ郡ハートロップで生まれ、ウプサラ大学を首席で卒業した。大学在学中にマルグレッタ・クリスチネ・ウォルバーグに会ったが、クムリンは彼女のことをつぎのように描写している。

〝わが国の美女のうちでも最も美しい人〟

二人は婚約し、姉のソフィア・ウォルバーグを付添人として、アメリカへ船出した。一八四三年八月二十日にニューヨークへ到着し、同年九月五日、ミルウォーキーで結婚した。そこから荒野を百十数キロ歩いてコシカノン湖のほとりに達し、そこに自分たちがすむ丸木小屋をつくった。

優秀ではあったが、あまり名を知られずにおわった博物学者について、エドワード・リー・グリーン教授はこう書いている。グリーン教授は、当時ノートルダムで植物学を教えていた人である。〝アメリカの植物学者で優秀な人はたくさんいるが、どの州をみても、ウイスコンシンのクムリン教授ほど、自州の植物全体に精通していた人はあるまい。これは自信をもっていえることである〟

ルイス・アガシがいたボストン博物館のために、クムリン教授は多くの標本を集めたが、アガシはクムリンのことを〝鳥の巣についての偉大な権威者〟と言っている。

カモメ、アスター、アネモネの名には彼に敬意を表して名づけられたものがある。

1　二つの世界を結ぶもの

「あーぁ、おーぅーぅ、おーぅー。あーぁ、おーぅーぅーぅー、おーぅー！」

この世のものとも思えぬぶきみな、うれいを帯びた吠え声が、西にひろがる深い森の奥から聞こえてきた。雪におおわれた東の地平線は、今、やっとほのかに暁の光がさしそめだしたところである。

ロビー・トレント少年は、いつも〝オオカミなんかこわくないさ〟と言っていた。だが彼は今その吠え声を聞くと、寝床の中で思わずぶるっと身ぶるいして、寝床のずっと奥へもぐりこんだ。ベッドはトウモロコシの殻と羽でつくってあり、ホームスパンの上掛けがかかっていた。その寝床の奥へ少年はごそごそともぐりこんで身をちぢめた。

夜の間に新しく雪が降ったらしい。小屋の屋根は手割りの板で雑に葺いてあったが、そのすき間から粉雪が舞いこんで、部屋の中に小さな吹きだまりができていた。外は一面にまっ白な新雪におおわれ、二月の汚れた吹きだまりの雪も、ふたたび新しい装いをこらしていた。

「あーぁ……おーぅーぅーぅ……おーぅーぅーぅ」

さっきの吠え声がまた聞こえてきた。声はさっきよりずっと大きく、近い。少年はふたたび背筋に寒けを覚えた。だがこの二階の部屋は安全だ。こうして安全な場所で、暖かい寝床にはいったまま、野性の叫びに耳を傾けるのは、なかなかいいものだ。

オオカミの声など、もう何ヵ月も聞いたことがなかった。罠や毒餌が、南部ウイスコンシンの森林地帯から、これら野生のオオカミをほとんど根絶やしにしてしまったのだ。もしも森林オオカミが一頭も見られないという時が来たらどうであろうか。その時、この毛深い獣の最後の一頭が惨殺され、巣穴から最後の子オオカミが掘りだされて、オオカミ猟師が、棍棒でそのオオカミの子をなぐり殺すのだ。そのあと、コシカノン湖をめぐる谷間には、もはや人の心を引きしめるような、この偉大な獣の吠え声がこだますることはないだろう。そういう世の中がくることを考えると、ロビー少年の心は深い悲しみを覚えた。

ロビー少年はその朝、早く起きた。朝食をのみこむようにしてすませ、こまごました雑用を片づけると、すぐ、ブッシービルへの小道をたどって歩きだした。

ロビー少年は毎週土曜にブッシービルへ行くことになっていた。彼はそれが楽しみだった。郵便を受け取りに行くのが目的なのだが、そのほかにも楽しみがあった。ライチョウがひそんでいるところを見たり、雪の上に残された足跡を見て、どんな動物がそこを通ったかということを見たり、アライグマが今でも、うつろのある木から出てきているかどうか見ることができるからなのだ。

ロビー少年は、年とった雌イヌのテシーを連れて雪の原

野を横切っていった。やがて父親の土地の東のはずれへ近づくにつれて、彼の期待はつのってきた。まもなく、じぐざぐの垣根が見えてきた。それは自分たちのトレント農場と、クムリンの所有地をへだてる境界である。そしてその垣根を境にして、二つの世界はまったくちがった様相をていしていた。

ロビーが住んでいるトレント農場の側は、かつては草原だった。今は耕されて、トウモロコシ畑になり、刈りとられたトウモロコシが整然と稲むら型にかけられていた。二階建ての大きな丸木小屋があり、そのまわりを手入れのゆきとどいたブドウ園と果樹園がとりかこんでいた。納屋と燻製小屋、タバコ倉庫があるが、いずれも水漆喰できれいに塗りあげてあった。つまりトレントの敷地はきっちりと整備され、簡素と剛毅さが感じられた。それは長く激しい労働の結晶であり、雑草の一本にいたるまで、吟味を加えなければ済まさない厳格な意志の現われでもあった。

いっぽうクムリンの敷地の側はどうかというと、野生のキイチゴやクロイチゴが茂り、夏にはいかにものびのびと野生の藪を形づくった。そしてさまざまの小鳥が、思い思いのところに巣をかけた。垣根は春になると燃えたつような緑の中にまぎれこんでしまい、秋には金色や褐色の木の葉や、炎のような色彩に燃える紅葉の中にうずもれた。八十エーカー(三二四〇アール)のクムリンの敷地のうち、六十エーカー(二四三〇アール)は、人手を加えぬ野生のままの状態に放置されていた。

今はちょうど新雪があたりをおおい、この二つの農場のちがいを包みかくそうとしているように見えた。しかしそれでも、トレント農場の側には、あいかわらず冷酷なまでの厳格さが感じられ、いっぽう垣根のむこうがわには、あちこちにオークの林の空地があり、動物が身をかくせるような藪がいくつもあって、なにか新しい冒険の可能性を秘めているように見えた。

クムリン教授は二十エーカー(八一〇アール)の土地を耕していたが、そこにはトウモロコシが乱雑に植えられ、それが刈りいれもされないまま、立ち枯れになっていた。クムリン教授は雌ウシを一頭とブタ二匹、それに年とった雄ウシを数頭飼っていた。その家畜たちに食べさせる餌がなくなると、トウモロコシを刈り倒すが、それも当座必要なぶんだけそのつど刈り、あとはほったらかしにしてあった。ウサギやリス、ソウゲンライチョウ、ウズラなどがそれを見逃すはずがない。かれらはどこへ行けば楽々と食べ物が手にはいるかということを、ちゃんと知っていた。だから、あたりには、いたるところに、そういう動物たちの足跡がついていた。

トレントの小屋から音楽が聞こえてくることは、めったになかった。ロビー少年の母親は、少女時代にオルガンを弾き、歌もよくうたった。しかしこのごろでは讃美歌さえ、めったに歌わなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ところがクムリンの農場では、いたるところの林や藪で、自然の音楽がかなでられていた。今は冬なので、鳥の歌はほとんど聞かれなかったが、いつもなら、にぎやかな鳥の歌にまじって、スア・クムリン*教授の吹く、澄んだフルートの音が聞こえてくる。時には教授の一番下の子が弾くギターの音とフルートが、みごとなコーラスをかなでることもある。

やがてロビーは垣根を越えられるようになっている踏み段のところへ着いた。するとその時、老犬のテシーが、しきりに空気の臭いをかぎながら、明らかに警戒の吠え声をあげた。

「テシー、どうしたんだ？」少年は聞いた。

イヌは鼻を鳴らして甘えた声をだした。

「オオカミか？」

とたんにテシーは、すさまじい声で、たてつづけに吠えだした。それから鼻面を高く空にむけ、悲しげな遠吠えの鳴き声をあげた。するとべつの吠え声が、ごく近くで起こった。それはイヌの吠え声ではなかった。何世紀にもわたる迫害と飢えの悲哀をこめた響きを帯び、ちょうど文明から隔絶された山小屋の周囲に悲痛な唸りをあげる木枯らしのような、やるせない孤独感に満ちた吠え声だった。

ロビー少年は、過去十二年の間に、何回となくその声を聞いてきた。だから今も、その吠え声を聞き誤るようなことはなかった。それはまちがいなく、今朝、明けがたに寝床の中で聞いたあのオオカミの遠吠えだった。

テシーは早くも尾をあと足の間にはさんで、ふるえだしていた。それはいかにも恐怖にうちひしがれたみじめな姿で、ロビー少年は忠実な老犬に、深い同情を覚えた。テシーも若いころは勇敢なイヌで、何年もの間、りっぱにつとめを果たしてきた。だが、今ではもうすっかり年をとって体力が衰え、炉ばたで静かに余生を送る年になっていた。

「よし、いいよ、テシー。家へ帰っていいぞ！」

ロビーは家の方へ手を振って言った。テシーはうれしそうに、かん高い鳴き声をあげ、ロビー少年のまわりをぐるぐる走りまわった。走りながら頭をさげ、舌をだらりとたらして、目が喜びに輝いていた。そういうテシーの姿を見ると、老犬が急に昔の若さに戻ったような気がした。

「行けよ、テシー。ぼくはこえくなんかないんだ」ロビーは言った。

テシーは少し足をひきずりながら、家のほうへむかってかけだしていった。足をひきずるようにして歩くのは、昔、オオカミと戦って腰に傷をうけたためだった。

ロビーはクムリン教授の敷地にすぐはいろうとはしなかった。まずロビーは垣根を越える踏み段に乗り、一番上の段に腰をおろした。そこからは、ロビーがかってに自分の天地だときめこんでいる土地が、一望のもとに見渡せた。さしわたし十八キロもあるコシカノン湖が見える。今は湖

面に厚い氷が張り、はるかむこうの岸まで、一面に白雪でおおわれていた。オークやヒッコリー、カエデなどの茂る低い丘が、湖の水の流出口へむかってなだらかに延び、流出口のあたりの沼地には野生のセロリーが生えて、水鳥たちに豊かな食料を提供していた。砂地の湖岸と低地の牧草地から、土地はしだいにゆるやかなスロープを描いて高くなり、トウモロコシや小麦、タバコなどの畑へつづいていた。

だがロビーは今、目の前にひろがるそういう景色を楽しむことができなかった。彼の心には、まだオオカミの遠吠えがこだましていたのである。ロビーはその時、若くて元気のいいイヌがほしいと心から思った。老犬テッシーを助けて日常の雑多な任務をはたし、今日のようにロビーの眼前にひろがるエデンの園を探検する時には喜び勇んでついてくるようなイヌがほしかった。

やがてロビー少年は胸の動悸がおさまり、呼吸も正常にもどった。

「どんなに年とったオオカミだって、こえくなんかないぞ」

彼はそう言うと、勢いよく垣根のむこうがわへとびおりた。そしてすぐに、ブッシービルの郵便局へ通じる小道を歩きはじめた。オオカミの足跡は、二度、小道を横切っていた。

〝大きいやつだ〟

ロビーはそう思った。なにしろ、ひとつの足跡が、長さ十五センチくらいもある。急にこわくなったのかどうか、ロビーはとにかく行くての村へむかって足を早めた。

こうして森の中にひそむオオカミの声を聞くということも、たしかに変わったできごとだ。しかしそういうことがないとしても、毎週土曜日のブッシービルへのお使いは、ロビー少年にとって、一週間のうちで最も楽しいできごとだった。

彼はそのにぎやかな居留地に魅せられていた。十数軒の家がちらばる中心部に、キヅタにおおわれた石造りの水車小屋が二つ建っていた。いずれもコシカノン川をはさんで、両岸にひとつずつ建てられていた。そしてどちらの小屋にも、苔むした水車がついていて、水車用貯水池から流れでる水で、くるくる回っていた。

近くの川の岸には製粉所があった。穀物の貯蔵場と、じょうご型の投入口、重い石の挽き臼があり、トウモロコシや小麦、ソバの実などが粉にされていた。トウモロコシの粉はトウモロコシパンをつくるのに使い、小麦粉は自家製のパンをつくり、ソバ粉ではホットケーキの類をつくり、バターとサトウカエデの樹液でつくった糖蜜をかけて食べるのだった。

ずっと遠くの川岸には、製材所の建物があった。そこではこのあたりから出る丸太をひいて板をつくっていた。その板は新しい家や納屋をつくるのに使われたものだった。そこへでかけていって、おがくずの山にとびのるのはじつ

に楽しかったし、製材士がなれた手つきで丸太をガイド・レールにのせ、巨大な丸ノコで挽き切るのを見るのは、おもしろかった。

川のこちらがわの岸では、挽き臼がごとごととにぶい音をたて、むこう岸では電気ノコギリが鋭い金属音をあげ、その二つの音が、ゆっくりと回転する水車の水のはねとぶ音と調和して、なんともいえぬ音をあたりに響かせていた。ロビー少年にとって、その音は、竪琴の奏でる音楽の音より心地よく耳に響いた。

ダムの下には、暗くて深々と水をたたえた魚釣り場があった。そこでは釣り糸をたれさえすれば、どんな餌をつけていても、たちどころに目の大きなカワカマスやクロマス、引きの強い小さなカマスがかかった。

だが水車や製材所より、もっとロビーの心をひいたのは、雑貨店兼郵便局だった。そこでは農夫やのらくら者たちが集まって、油を売ったり、よもやま話に花を咲かせていた。

雑貨店には、あらゆる少年の心を楽しませる〝宝物〟がいっぱいあった。シカの角の柄がついた六枚も刃があるジャックナイフや、竹製の釣り竿、じょうぶな緑色の釣り糸、赤と緑のまだらになった大きな浮き、それにコシカノン湖の一番大きい魚でも釣りあげられるような釣り針などがあった。

また大きなガラスのびんがずらりと並んでいて、その中に、ありとあらゆる種類のキャンデーがはいっていた。縞模様のハッカ入り砂糖菓子、野生のニガハッカで味をつけた砂糖菓子、カンゾウのエキスで味をつけた黒いクリーム菓子などだ。ここではよほど用心しないと、たちまち手持ちのお金を使ってしまうことになる。

またその店にたちこめている芳香は、父親なら〝神も喜びたもう〟とでも言いそうな、においだった。これはロビーにとっても同じだった。つけ物の樽があいていて、いつでも味ききをすることができた。樽からはつけ物用の香味料イノンドの鋭いにおいと、塩水のにおいがたちのぼっていた。さらに塩ダラのにおい、燻製のハム、コーヒー豆、お茶の葉、あらゆる種類の調味料や薬草などのにおいがごっちゃになって、なんともいえぬ香りを店の中に漂わせていた。

ここにはまた、胃袋を満たす食物ばかりでなく、心の糧も売っていた。たとえば写真入りのハーパース・ウィークリーやトレド・ブレイド、それにニューヨーク・トリビューンといった雑誌類を売っていたのである。店の主人が断言するところによれば、ここで売っている雑誌を読めば、最新のニューヨーカー誌を読んだのと同じくらい最先端のニュースにくわしくなり、共和党の情報通だったホーラス・グリーリーに劣らぬほど時局にくわしい人間になれるということだった。

だがこの田舎の村の国際性を最もよく現わしているの

は、なんといっても、郵便局の小さな私書箱の行列だった。人びとの中には読み書きのほとんどできない人も何人かいた。しかし村人たちはみんな自分たちの出身地にいる親しい人びとからの便りを待ちわびていた。

ロビー少年は英国のダービーシャーにあるトトレー村からの便りをいつも待っていた。彼の父親は、その村からの移民だったのだ。だが郵便の消印はドイツのものと、スカンジナビアのものが多かった。

しかしなんといっても興味をそそる手紙を受けとるのは、一文無しの博物学者といってもいいクムリン教授*だった。教授はそういう手紙を、よく若い友とも弟子ともいうべきロビー少年に見せた。そしてロビーは、けっきょく、その問題に専門的に首を突っこむようになった。つまりロビーがいろんな鳥の卵を見つけて巣から盗みだし、教授がそれを卵の蒐集人や世界中の大きな博物館に売るのだった。だが、少年も教授も、この困難なきびしい仕事に対して、けっして十分な報酬を受けているわけではなかった。

ロビーが郵便局兼雑貨店へはいっていった時、カウンターのところに、ちょうどクムリン教授が立って、係の男と話しているところだった。

「オランダのライデンから、わたしあてに、なにかきていないかね？」

「なにもきていませんよ、先生」

「船が一隻も入港しないのか！」スア・クムリン教授はひとりごとをつぶやいた。端整な肩の線をした金髪碧眼の紳士は、やや気落ちしたようだった。かれが着ているホームスパンの上衣は妻のマルグレッタが、自分たちの飼っていたヒツジの毛をすいて糸に撚り、染色して織りあげ、それを裁って仕立てたものだった。しかしそれもだいぶ古びて、みすぼらしく見えた。

「どうしてライデンからの手紙を待っているの？」ロビーは静かに聞いた。まじめそうな黒い目の少年は、博物学者がひどく失望したのに気づいていた。

するとクムリン教授は、それにこたえて言った。

「いや、なに、ロビー。君も覚えているだろうが、わしは去年ライデンの王立博物館に百三十八羽の鳥の剝製を送ったんだよ」

「鳥の巣と、中身を抜いた卵もいっしょにでしょ？」

「そうだ。その標本はちゃんとぶじに、ライデンに到着している。ところが先方では、まだ一ドルも払ってこないんだよ」

「じゃあ、むこうの人たちは、先生をだましたの？」

「いや、そうじゃない。だが、ひょっとすると、あの連中は、わしとマルグレッタが両方とも死ぬまで、支払いをのばす気かもしれんぞ」

店の中では、だるまストーブが唸りをあげて燃えていたが、ロビー少年は教授のその言葉を聞いて、急に寒けを覚えた。

スア・クムリン先生が死ぬ？　だいじな先生であり、友だちでもあるクムリン教授が死んだら、あとはいったい誰が自分にいろいろ教えてくれるのだろう？　それに湿った臭いのたちこめるカラマツの沼地へ連れていってくれる人もなくなってしまう。その沼地には美しい野生のランが咲いていた。ピンクと白のインディアン・モカシンというランや、レディーズ・スリッパーという小さな黄色いラン、そしてクムリン教授がこよなく愛している大きなすばらしい匂いを放つ珍種のサワランが生えているのだ。ロビーは憂うつになった。だが彼が目をあげた時、教授はもうさばさばした顔つきをしていたので驚いた。

「ロビー、ごらん！　ボストンからこんなものを送ってきたよ」

そういって先生はロビーが両手でかこった手のひらの上に、ざらざらと宝石のようなものをあけた。それはいろんな色をしたガラス玉だった。赤、黄、灰色、こはく色、暗褐色などの色がつき、それが何重もの円や楕円形に描かれていた。

「目だよ。ガラス製の目なんだ！」

先生は満足そうにほほえみながら言った。

「その小さくて精巧にできているのは、ノドアカハチドリにいいな。それから大きい恐ろしい感じのものは、ハクトウワシにぴったりだぞ」先生は得意そうに言った。

「この二つは、先生のアカメモズモドキにいいね。それから、この二つはホオジロガモに向いているよ」ロビーが言った。

その村の雑貨店に集まっている連中は、大部分が剝製の鳥の目に使うガラス玉になど興味はもっていなかった。しかし、みんなクムリン教授とロビー少年の話を、なんとなく珍しい話でも聞くような気持で聞いていた。その連中は、クムリンが口にする鳥や植物のラテン語の名前は理解することができなかった。しかしかれらは、その穏やかなスウェーデン人が、自分たちの理解を絶した神秘的なことを知っているのだということを、おぼろげながら承知していた。そしてまた、かれらは同時に農夫として失敗者であるクムリン教授に、軽い軽蔑の思いも抱いていた。この先生は、よく雄ウシに犂をつけたまま、ウシも犂もいっしょに畑の中にほうりだして、鳥やチョウチョを隣の町まで追いかけていったりする。その間、雄ウシは畑に残って、のんびり食物を反芻しているという状態だった。だが人びとは、昔、自分たちがいた国の言葉で手紙を書いてほしいような時には、さっそく先生に頼んで、ただで手紙を書いてもらうのだった。すると先生は、ほとんどどんな言葉でも手紙を書いてくれた。*

そして〝用もないことを知りすぎている〟というのが、先生に対する農夫たちの共通の評価だった。そのくせ、農夫たちは自分の土地を先生に調べてもらうのを喜んだ。

先生は五十三歳だったが、その気質には、まるで子供の

ようなところがあり、年よりなのか子供なのかわからないことがあった。たしかに両手は野良仕事で荒れ、ふつうの農夫と同じようになっていた。端整な顔にも、老いのしわが刻まれていた。しかし同時に、非常に機敏な一面があり、知的好奇心が旺盛だった。

ロビーと先生は、今、フランネルで裏打ちした雌ウシの皮製の指なし手袋をはめ、二月の厳しい空の下へ出ていこうと、支度をはじめた。

「塩と布地を忘れなさんなよ」店の主人が呼びかけて注意した。

「そうだ。どうも忘れっぽくなってね」先生は言った。

「八十七セントだね」

「はて、バターと卵も買ったはずだが……」

「勘定はまだみんなすんでいないですよ」

そこで先生は、ポケットをあちこち探った。そのうちにポケットを全部裏返して見せ、金の持ち合わせがないということを示した。店のあるじは、先生のそのおどけたしぐさを見ても笑わなかった。そして、こう言った。

「先生、ちょっと話したいことがあるんですがね」

クムリン先生には、店主のエフライム・ブッシーがなにを話したがっているかということがわかっていた。それはストーブを囲んで時間をつぶしている連中にもわかっていた。そして店の中はその時、急にひっそりと静まりかえり、店の隅にかかっている柱時計が、かちかちと時を刻む音まで、はっきりと聞きとれるくらいになった。

「わたしのつけのことだね」先生は言った。

「そうです、旦那。あなたのつけのことですよ」

ストーブのまわりにいる連中の中でも、ボスのような感じの男が、とくに関心ありげに耳をそばだてた。その男はコートを着て帽子をかぶっていたが、そのコートや帽子はヤマネコ数頭分の命を奪って、その毛皮でつくったものだった。とくにコートは、どんな吹雪でもはねかえしてしまいそうな感じだった。今はストーブにあたるため、コートの前をはだけていたので、下に着ている大きなチェック模様の上衣と、まっ赤なサテンのチョッキが見えた。チョッキにはいくらかしみがあり、胸元を横切るような形で金色の太い鎖が光っていた。そして今、その男は金色の軸をしたガチョウの羽ペンで歯をほじりながら、しきりになにか考えこんでいるようだった。

先生が店主にいろいろ言いわけしている言葉が、男たちの耳にもきれぎれに聞こえた。

「ライデンからそろそろ金が来るころなんだよ……アルビオン専門学校から教授料二百ドル……新しい家を建てるので材木がいるんだが……」

するとその時、ヤマネコのコートを着て、黄色い目をした男が言った。

「先生、わたしには、あんたを助けてやることができると思うんだがね。いや、わたしゃ大学など出ちゃいないか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com